

# 井上円了とその家族

生家の慈光寺と栄行寺を含めて

## 三浦節夫

*mizura setsuo*

本稿は、井上円了とその家族（生家と家庭）という第一次的な人間関係について、文献調査や聞き取り調査の結果から得た事実をまとめたものである。はじめに、父母の生家である慈光寺と栄行寺の沿革を述べ、つぎに、円了の祖父母・父母・兄弟について記し、最後に、円了の妻と子供について取り上げる。

### 一 慈光寺と栄行寺

いかに公平に諸宗教諸宗派を審判してみても、信仰の一段に至りては、真宗の外にいまだ余が意に適するものを発見せず。これ一〇歳以前家庭において受けたる教育の仏縁が、内より自発せしによるならんか。あ  
あ快哉南無阿弥陀仏。

井上円了は終生にわたり真宗を信仰した。そして、親鸞を開祖とする真宗（浄土真宗）の寺院に生まれたことの意味を、少し強い口調でこのように記している<sup>1)</sup>。円了は安政五（一八五八）年に、真宗大谷派（東本願寺）の末寺である慈光寺に生まれた。父の円悟は次男であったが、のちに慈光寺の第一四世の住職を世襲した。母のイクは、栄行寺の第一三世住職である大溪覚瑞の長女であった。父母ともに寺族であるという典型的な真宗寺院

に、円了は生まれた。慈光寺と栄行寺という二つの寺院は、真宗の教勢が強い新潟県下にあるが、慈光寺は三島郡浦村、栄行寺は中魚沼郡水口沢村と離れており、またその歴史も異なっている。円了の生涯に大きな影響をもたらした二つの寺院について、はじめに慈光寺、つぎに栄行寺の順に、その沿革をみることにしたい。

円了の生家である慈光寺の地名は、越後国長岡藩西組浦村、新潟県三島郡浦村、同郡来迎寺村浦、同郡越路町浦と変遷し、最近になって長岡市浦となったが、慈光寺の歴史について、『三島郡誌』はつぎのように記している(2)。

浄土真宗大谷派東本願寺末寺で開基行円創立、中興慶伝、天台宗であつたが後其の宗に帰向し、万治元年五月慈立院を慈光寺と改めた。開基干支不詳。為に中興慶伝を以て歴代の初となしてある。本尊阿弥陀仏立像作人不詳。

この開基の年代について、最近の出版された『越路町史』は、上杉謙信の時代に真言宗の寺院が豪族や武将の庇護を受けていたが、上杉の移封とそれに続いた越後一揆でこれらの寺院は大打撃を被り、その後へ進出してきたのが浄土真宗であり、同地方の寺院勢力に大きな変化をもたらしたといい、これらの真宗寺院の多くは、北信濃に由緒があると指摘する。そして、慈光寺もそのうちの一つであるとして、つぎのように記述している(3)。

(1) 内は引用者の註。以下同じ。  
浦の慈光寺は万治元年(二六五八)の創立とするが、その前、元和二年(二六一六)には浦村に招請されていたという……山号の大岩山と姓の井上は、ともに信濃高井郡の地名(井上郷)によるものと思われるので、この寺も北信濃系統であろう。

この記述は、幕末にまとめられた大平与文次の『三島郡浦村温古録』を資料としている。大平与文次の同書で

は、慈光寺についてつぎのように記している(4)。

当寺先祖ハ源家ノ武士(マコ) 井上ノ後胤ニシテ大岩山ト号ス、天正四丙子年ノ開基ニシテ古志郡麻生田村ニ建立ス、同郡長岡岡(東) 浄土真宗妙宗寺ノ末寺ナリ、元和二丙辰年七月本村信徒ノ招請ニ依リ信濃川西岸ニ瀨シ字岡下畑ニテ敷地公竿入五畝五歩ヲ賜リ移住ス「目下清蔵邸地ナリ」、数年ヲ経ズシテ川欠、且ツ本村ト遠隔ノ地ナルヲ以テ村北際当時ノ場所ニテ敷地公竿入壹反壹畝式拾五歩ヲ賜リ移住ス、除地高境内共ニテ五石六升九合歴然タル免除地ナリ、

(上欄外)「字ヤギシト原ニ慈光寺免ト称スル畑ニケ所アリ、寛政十二申年検地入マデ免除地也」

このように、慈光寺の開基の年代やその後の変遷が記されている。新潟県では明治一六年に神社寺院仏堂明細帳が作成されている(現在、新潟県立文書館に所蔵)。この資料では、慈光寺の由緒、施設、門徒などがつぎのうに記されている(5)。

新潟県管下越後国三嶋郡浦村字浦屋

本山京都府山城国愛宕郡下京区常葉町本願寺

真宗大谷派 慈光寺

一 本尊 阿弥陀仏 立像

一 由緒

(略)「万治元年五月廿五日創立、開基慶伝タリ、従前除地高五石六升所有之処、明治七年返上」

一 堂宇間数

本堂 間口七間半  
奥行八間

鐘堂 間口八尺  
奥行弐間

庫裏 間口九間  
奥行四間半

門 間口九尺  
奥行七尺

一 境内坪数并地種 民有地第一種

六千四百三十七番地

七百六十八坪 官有地御下渡ニ相成候

外二六千四百三十四番地

宅地三百拾弐坪 従前民有地第一種

六千四百三十六番地

宅地百廿九坪 従前民有地第一種

右之通相違無之候也、

一 境内地 壹宇

檀中惣代 浦村

太子堂

明治十六年七月廿九日 西脇所次郎 ㊦

本尊 聖徳太子 木像

同 道半村 高橋 三郎 ㊦

由緒 天保七年八月創立

同 宮川外新田 高橋 九郎 ㊦

堂 梁間七尺  
奥行八尺

一 住職 三嶋郡浦村 井上円悟

一 檀徒人員百二十人

住職 訓導 井上 円悟 ㊦

一 管轄庁迄 式十里拾五町

以上

新潟県令永山盛輝殿

この書類には慈光寺の塔頭であった「慈教寺(住職は井上円悟)」が続いて記されているが、同寺の信徒人数は一五〇人であり、古志郡西野村へ移転している。さらに、同書類には井上円悟名で明治一七年六月廿二日に出された「御尋ニ付上申」があり、慈光寺の創立を寛永二年三月から万治元年五月とすること、慈教寺が慈光寺の塔頭から真宗大谷派の末寺となった時期の確認を求めている。

円了の生家である慈光寺は、明治維新の後に、小学校が設立される前に、一時、地域の学校になったことがある。このことは慈光寺の沿革として特記すべきであろう。『越路町史』にはつぎのように書かれている(6)。

学制発布に先立つ明治四年、浦・宮川外新田・飯島・中沢などの有志が協力して浦村の慈光寺内に、地域の子弟を学ばせる塾を開設した。教師は、戊辰戦争後同村に寄寓していた旧長岡藩の儒学者木村鈍叟で、慈光

寺に生まれ、のちに東洋大学を創設する井上円了も教師役を担っていたという。

このように、円了が生まれた頃の慈光寺は、すでに二〇〇年以上の歴史をもち、明治になって地域の教育を担っていた。

つぎに母のイクの出身寺院である栄行寺についてみることにしたい。栄行寺の地名は、越後国桑名松平藩領山谷組水口沢村、新潟県中魚沼郡水口沢村、同郡千手村、同郡川西町と変遷し、最近になって十日町市となった。

栄行寺の沿革は、『川西町史』の中で、つぎのように記されている<sup>7)</sup>。

天和二年（一六八二）の「栄行寺由緒書上」には、浄土真宗の栄行寺について、その本寺は高田の本誓寺で、開基は法教、天正九年（一五八一）田畑を切り開いて寺基を確立し、その後、慶長年中（一五九六～一六一五）の検地によって除地が認められた、寛永七年（一六三〇）には除地の「御墨付」を頂戴し、寛文三年（一六六三）に火災にあつて「御墨付」を焼失したが、除地の石高は「六石二斗四升三合」であることが訴えのべられている。

栄行寺は寺基を確立した九年後（天正一八年・一五九〇）に、安土桃山時代の本願寺第一一世の顕如（天文一二・一五四三～文禄元・一五九二）より「親鸞聖人十字御名号」の御真筆を下附されている<sup>8)</sup>。右の引用文は天保二年（一六八二）の訴訟に関する文書<sup>9)</sup>によってまとめられたものであるが、最近刊行された『十日町市史』では十日町（中世の妻有）において越後に流罪となった親鸞に帰依した者が出現し、その頃から同地に真宗が扶植されたと述べて、栄行寺の開基はつぎのように記されている<sup>10)</sup>。

水口沢（川西町）にも、永正十年（一五二三）僧法教、俗名渡辺源十（重）郎綱直（天文十三年―一五五四寂）によって栄行寺が創設された。そのあと二世法順（一五五〇）に引き継がれて寺基が固まり、天正九年

(一五八二)には現在地を切り開いて堂宇が建立された。

この記述は『中魚沼郡誌』①の資料をもとに書かれたものと考えられる。この資料には開基以来の歴代の住職名が記されているが、そこに沿革が過ぎるように書かれている。

榮行寺 檀徒三百四十九戸

大字水口沢に在り、境内三百四十坪、光雲山と号す、山城国京都、真宗大谷派、東本願寺末にして、本尊は阿弥陀如来、永正十年僧法教の開山なり、寛永二年、祝融の災に罹り、正徳二年七月再建す、天和三年、検地の際、水口沢にて二石五斗二升六合、山野田にて三石七斗一升七合の地を附与せらる、明治九年十一月改築す。

榮行寺では、江戸時代に「京都の本山の学寮で仏教や真宗の教えを学び、帰国後にこの地方の教学振興をになつた勸学者を輩出している」といわれる②。明治時代の榮行寺については、明治一六年の神社寺院仏堂明細帳(現在、新潟県立文書館に所蔵)に、由緒、施設、門徒などが過ぎのよう記されている。

#### 寺院明細帳

#### 一 由緒

〔附録〕永禄年中創立開山法教タリ寛永二年焼失正徳二年七月再建明治九年□月破壊有更ニ再建天和三年旧幕府ヨリ除地高六石二斗四升三合附與ノ処明治七年三月通り

真宗大谷派

榮行寺

一 本尊 阿弥陀仏

返上従前境内官有地ノ処明治九年九月無代價後下渡ノ許可ヲ受

寛永二年焼失正徳二年七月再建更ニ破壊ニ付

明治九年十一月再建

一 堂宇間数

本堂 間口八間三尺 庫裏 間口五間三尺  
奥行九間三尺 奥行三間三尺

経蔵 間口二間三尺 鐘樓門 間口三間三尺  
奥行二間三尺 奥行二間三尺

一 境内坪数并地種

六十二番 三百四十坪 官有地第四種

内貳拾六坪 洋運寺工賃地

一 境外所有地

五十八番 畑反別壹畝拾歩

水口沢村字千手新田

地價貳円七拾銭

〔この外に、五六カ所の宅地、田、畑、原野、山

が記されているが、省略する〕

一 住職

中魚沼群水口沢村  
権少講義

大溪覚祥

新潟県令永山盛輝殿

この書類には栄行寺の塔頭であった「浄雲寺（住職は藤本祐恭）」が続いて記されている（その後、同寺は末寺と

なつて移転した）。なお、現在の栄行寺では沿革をつぎのように述べている<sup>13)</sup>。

真宗大谷派 光雲山栄行寺は渡邊の末孫渡邊源重郎綱直の開基。高田・上杉謙信公の幕下の折永禄年中仏

一 檀徒人員三百九拾三人

一 管轄庁迄距離 二十七里二十六町拾五間

右之通相違無之候也

檀中惣代

東善寺村

喜多正三郎

眞田村

小海長七 ㊦

仙田村

田中政治

貝野村

吉沢彦市郎 ㊦

住職

権少講義 大溪覚祥

門に入る。高田・本誓寺に附属後、一時犬伏、北鎧坂、浅川原に居住する。天正九年現在地に定住。

これまで、慈光寺と栄行寺の沿革などを資料によって記してきた。二つの寺ともに、創立の年代に異説はあるが、栄行寺は一五〇〇年代、慈光寺は一六〇〇年代に創立されたことは間違いないところである。また、明治一六年の寺院明細帳によれば、栄行寺の檀徒（真宗では門徒という）は三九三人、慈光寺の檀徒は一二〇人と、規模にも相違がある。慈光寺の規模は一般の寺院と同様であるが、栄行寺はそれ以上である（後者の場合、本願寺の頭如から名号の下附があり、地方の拠点でもあったからであろう）。このように、二つの寺には相違点もあるが、しかし、真宗の振興を担った教学関係者がいた点では共通性している。慈光寺については、すでに紹介した「塾」の存在の他に、次項で述べる住職の活動がある。

以上のことから検討すると、将来の住職の後継者として誕生した円了はその成長過程において、慈光寺と栄行寺の歴史や教化活動から大きな影響を受けているものと考えられる。

## 二 円了の祖父母・父母・兄弟

慈光寺の円了を含む家族のそれぞれについて記す前に、戦前の大正六（一九一七）年に「浦尋常高等小学校」の用紙に書かれた慈光寺の由緒をみておきたい。この中に、円了の祖父や父のことが紹介されているからである。

慈光寺由緒

浄土真宗大谷派末寺

同寺ノ由緒ハ記録有セザルヲ以テ詳ナラサレドモ伝フル所ニ依レバ往時新津ノ華城寺（兄弟）ト共ニ下総ノ



磯部村ヨリ越後ニ来リ浦瀬ニ至リテ一ツノ庵ヲ建テラレシガ後間モナク今日ノ五百島附近ニ移サレタリト當時ハ一ツノ庵寺ナリキ四世古山師ハ長岡市寺町ノ妙正寺ノ伴僧タリ尔後浦ニ至リテ現今ノ地ニ一字ノ寺ヲ建立ス之レヲ慈光寺開山トナス古山師ハ享保二年即チ今ヨリ二百年前ニ示寂セラレタリト言ヘバ二百年以上ノ歴史ヲ有スルコト明ナリ五世——〇——〇——〇——十世マデノ間ハ記スベキナシ第十一世祐慶師ハ木兎坊ト号シ俳諧ノ宗匠ニシテ書ヲ能クセラル十二世円実師ハ号ヲ讚勵ト称シ博学ニシテ僧侶ヲ三條ニ集メテ教鞭ヲトラレ且ツ熱心ニ各地ニ布教セラレタリ十三世円解師ノ代嘉永元年今ヨリ六十九年前ニ至リテ従来ノ寺ヲ改築シタルガ現今ノ御堂ナリ其ノ後十四世円悟師——円了氏(文学博士)——老僧(円成氏)——現住職(成章)ニ至リタルモノナリ

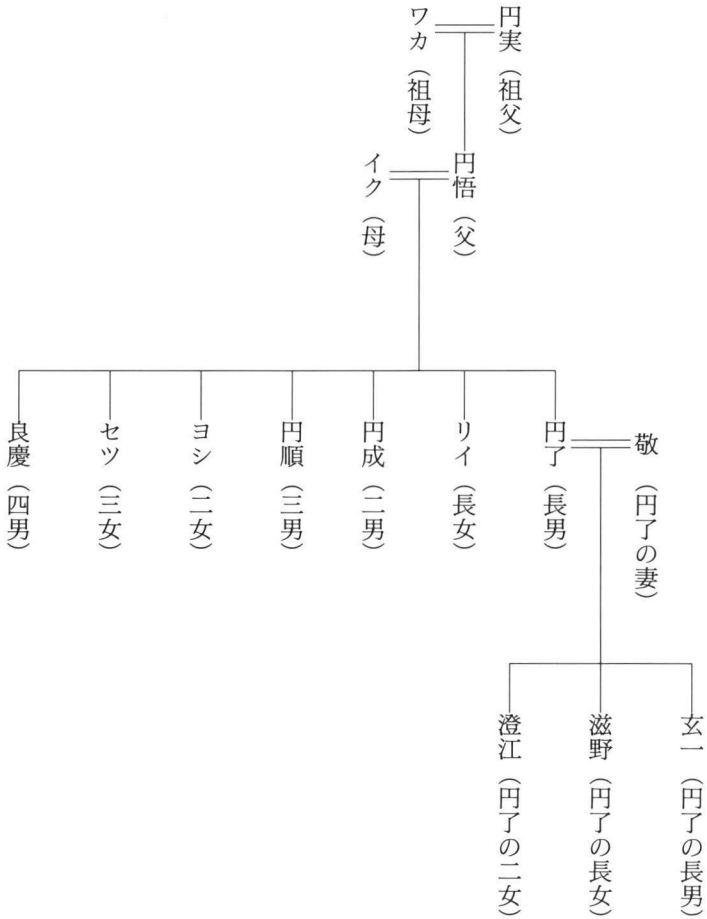
このように、慈光寺の江戸時代の後期の住職は、第一一世が祐慶、第一二世が円実、第一三世が円解、第四世が円悟である。円了の祖父は円実であり、父は円悟である。円悟は円実の次男であるから、円解は長男で円悟の兄であったことがわかる。円了からみた家族について、その関係を図示すると、次頁のようになる。つぎに家族のそれぞれについて、戸籍などをもとに記しておきたい。

祖父の円実が慈光寺の第一二世で、生没年は不詳であるが、さきの文書で記されているように、東本願寺教団の越後における中心の一つである三条の学校で教鞭をとり、さらに各地で布教を展開していたと伝えられている。円実の妻で、円了の祖母であるワカは、新潟県古志郡上条村の鷲尾徳勇亡の二女で、文化一四(一八一七)年一月一日に生まれ、明治四〇(一九〇七)年四月一三日に亡くなった。

父の円悟は、天保元(一八三〇)年九月九日に生まれ、明治二七(一八九四)年一〇月三〇日に亡くなった。

円悟は慈光寺の第一四世住職となり、円実の実績を引き継いだ。明治の学制発布以前に、慈光寺において地域の

## 井上円了とその家族



小学校の前身にあたる私塾を開設したことは前述のとおりである。真宗大谷派の教団でも明治政府と時を合わせ  
たように、僧侶の教育機関の創設を急いだ。教団では大・中・小の教校を中央から地方へと展開する構想であつ

た。のちに円了が教師教校英学部へ招聘されたのは、これらの学校の教員を養成するその指導者を育成するためであった。円了が本山の給費生となつて東京大学へ留学していた頃、父の円悟も三条教区（真宗大谷派の行政区名で、新潟県下は二教区）で小教校の創設を担っている。明治一四年一月に、本山の東本願寺へ円悟が送つた報告には、そのことがつぎのように記されている<sup>14</sup>。

越後国米北小教校の事は……同国三島の郡浦村の井上円悟氏より委き報知がありましたゆへ重てその詳細を記しますまづ該国を二つと分けて米山の南を米南とし米山の北を米北とし各つの小教校を設く（以下略）この円悟の報告では、米北の小教校をどこに定めるかで紛糾したが、結局、三条に決定したという。円悟はただちに、この米北小教校の「建築掛」に任命され<sup>15</sup>、明治にふさわしい教団の教育制度の新設に取り組んでいる。このことから、長男の円了が京都の本山から選抜されて教師教校へと進んだことの意味と重みを、父の円悟が一番理解していたと考えられる。

長男の円了は、もともと慈光寺の住職を世襲する「候補衆徒」であつたが、明治維新という時代の転換を見据えた真宗大谷派では、寺格などの身分にとらわれない教育政策をとり、英才教育による次代の後継者の育成方針のもとで、円了は当時の最先端の学問を東京大学で修学し、教団の願いを担つて衰頹していた日本仏教の再建・近代化を実現した。円了は日本を代表する若き知識人になつたのであるが、長男による世襲制が社会制度になつていた当時では、中央でどのように活躍しようと、それで生家である慈光寺の継職問題は解決しなかつた。三条で教団の学校の創設に担つた円悟が、住職の襲職をめぐる、長男である円了と慈光寺の門徒との間で苦悩していたことは、明治二二（一八八九）年八月二八日付けの円了から父円悟に宛てた書簡<sup>16</sup>からうかがわれる。次期住職の問題は、円悟の没後に、二男の円成が第一五世となることによつて解決する。

母のイクは、天保四（一八三三）年一月一日に生まれ、明治四二（一九〇九）年八月二七日に亡くなった。イクが中魚沼郡水口沢村の榮行寺の大溪覚瑞の長女であったことはすでに述べたが、母のイクに関することは文書に残っていない。子孫が伝えるところではつぎのような逸話がある。円了は一〇歳で明治維新を迎えたが、その年から先生や学校での修学を始めた。この年に通ったのが石黒忠恵の塾である。降雪の朝で塾が開けないと思っていた石黒夫妻は、その悪天候の中を通ってきたのが円了であったと語っている<sup>⑩</sup>。また、円了が雪の中を鼻緒の切れた下駄をもって、石黒の塾へ通学してきたともいう。それは母のイクの教育によるものであった。母のイクは、鼻緒が切れて自宅へ戻ってきた円了に、どこで切れたのかを問い、切れたのが途中ならば、がまんして歩けば、石黒の塾の授業に間に合うことを論じたという逸話がある。このように、円了の合目的思考を初めに築いたのが母のイクであったという。イクはまた、哲学館を開設した円了の事業を見守り、「慈光寺がつぶれても、円了の事業を支える」といって、円了の志のよき理解者であったとも伝えられている。

その母に育てられた円了は、明治四二年に、母の危篤を島根県への巡講の途中の静岡県下で知り、深夜に郷里へと急いだ。母の臨終には間に合わず、イクは円了が到着する二時間前に逝去していた。その後、円了は巡講の予定を断り、母を偲んで哲学堂にこもって喪に服したことを、円了自身が書いている<sup>⑪</sup>。円了は個人的なことを書き残さなかったことで知られるだけに、そこには母のイクへの強い思いが表われていると考えられる。

長男の円了は、安政五（一八五八）年二月四日に生まれ、大正八（一九一九）年六月六日に没している。円了の事績の詳細は別に述べたことがある<sup>⑫</sup>ので、寺や教団に関するなどを記すことにしたい。

初めに円了の名前について述べると、誕生から三回改名されている。円了はこのことをつぎのように記している<sup>⑬</sup>。なお、円了の誕生日は旧暦（日本暦）の二月四日であるが、新暦（西洋暦）では三月一八日<sup>⑭</sup>の彼岸にあ

たる。

余はもと春期彼岸に生まれたり。よつて、幼名を岸丸といい、後に襲常と改む。襲常の語は『老子』に出ず。余が昔日、石黒「忠憲」先生の門下でありしときは襲常と称せり。後に国を去るころは、さらに改めて円了という。父の名を取りしによる。号の甫水と称するは、その生まれたる地名、浦村の「浦」の字を取りたるなり。

円了は明治四（一八七二）年四月二日に得度し<sup>⑧</sup>、晩年、この得度をめぐる事情を自分で明らかにしている<sup>⑨</sup>。円了は東本願寺の給費生として東京大学に学んだが、哲学館を創設するなど教団から離れて著述や事業を行った。そのことから、いわゆる還俗したように見る人がいるが、真宗大谷派の僧籍はそのままになっている。円悟の逝去から九か月を経た明治二八（一八九五）年七月二五日に、円了は廃嫡届けを出した（分家は明治四〇年七月二三日である）。明治二九（一八九六）年一〇月に、かつて同じく留学生として学んだ清沢満之たちが雑誌『教界時言』を創刊して、いわゆる白川党宗門改革運動という教団改革を展開したとき、円了もこの運動へ積極的に参加した<sup>⑩</sup>。戦後の昭和三二（一九五七）年一〇月一八日に、真宗大谷派は円了に対して「僧正」と「講師」を追贈し<sup>⑪</sup>、改めてその歴史的功績を評価している。

長女のリイは、万延元（二八六〇）年六月一日に生まれ、昭和一二（一九三七）年三月二七日に亡くなった。リイは、浦村の西脇皆三郎と結婚した。西脇皆三郎は、明治三五（一九〇二）年に、浦村などが合併して誕生した来迎寺村の初代の村長に就任している。

二男の円成は、文久二（一八六二）年二月一〇日に生まれ、大正五（一九一五）二月一日に亡くなった。円成は東京に創設された真宗大谷派の学校に学んでいる。そのことは教団の機関誌に、二度にわたりつぎのように

記されている。

○〔明治一九年〕去六月東京大谷教校普通高等科進級検査ヲ行フ卒業人名ハ左之通

第四級卒業 井上円成

○又同校生徒平素着実勉勵ノ者左之通り賞与セリ

文明史部 井上円成<sup>㉔</sup>

○又東京大谷教校ニ於テハ客月〔明治一九年二月〕十六日進級検査ヲ施行セリ及第者ハ普通高等科第三級

井上円成<sup>㉕</sup>

明治二〇（一八八七）年は、兄の円了が哲学館（東洋大学の前身）を創立した年であるが、円成も東京にあつて、このように修学すると同時に、兄の円了が学校の創立に先立って、同年一月に創設した「哲学書院」の経営者となつた<sup>㉖</sup>。この出版社は、哲学諸科の書籍の刊行の他に、兄の円了が創立した哲学会や国家学会の事務所が置かれ、『哲学会雑誌』『国家学会雑誌』という機関誌も発行した。円成が兄の事業を引き受けたことにより、円了の教育と文化への幅広い活動が可能になつたと考えられる。兄の円了の項で述べたが、慈光寺の継職の問題は円成が逝去した後、円了は廢嫡届けを出し、二男の円成が明治二八（一八九五）年七月二九日に家督を相続し、また慈光寺の第一五世となつて解決した。

円成の真宗大谷派における事績として記さねばならないことは、明治二九（一八九六）年一〇月に、清沢満之たちによって始まつた白川党宗門改革運動への積極的な参加である。すでに記したが、兄の円了は教団外から檄を飛ばし、哲学館の卒業生に呼びかけるなどしてこの運動を支えたが、教団内にあつた弟の円成は越後地方の代表者となつて、各地で演説を行い、革新全国同盟会の主たる委員として上洛して活躍した<sup>㉗</sup>。この運動によつ

て、大谷派では新「議制会」という議会が設置されたが、明治三〇（一八九七）年七月一〇日に円成は公選による初めての議員である「賛衆」に当選して任命され<sup>③</sup>、開催された初めての臨時議会で、法主の「御親示書」への奉答案の作成について、議会運営の基本を体制主導から議員主導への転換するために、つぎのような質問を行う<sup>④</sup>など、活発な議会活動を行っている。

議長は委員付託の草案につき討議せんことを告げ、土屋録事奉答文草案を朗読す、井上円成氏起て委員の起草案を語り、新に起草せしに非ずして原案修正に止るが如しと皮肉を云しに、議長は委員をして新に起草せしめるものなりと告ぐるや、井上氏は更に此の如きことには委員其の職を尽さざるに似たりとの論評を試む、

ところが、円成の議会活動は長く続けられなかった。「越後の公選賛衆にて同盟会員たる井上円成氏は病の故を以て議制局賛衆を辞任したり」<sup>⑤</sup>と報じられているように、病気により辞任せざるを得なかったのである。兄の円了は、明治二九（一八九六）年二月一三日に類焼から哲学館を失い、その再建のために教団の改革運動に参加できなくなったが、兄に代わって全国的に活動し、議員として新しい教団作りを目指した円成も病気で辞任した。結果的に、兄弟は待望した真宗大谷派の改革を十分に推進することができなかった。

三男の円順は、慶応元（一八六五）年六月二九日に生まれ、明治四〇（一九〇七）年八月二五日に亡くなった<sup>⑥</sup>。円順は、「三条真宗中学校に学び、つぎに県立農学校に入学した。常に級中の首席を占めたように成績優等であった」。その後、真宗大谷派の光賢寺に入寺し、藤井円順となった。「兄が創立した哲学館にも学び、その傍ら哲学館の書記長〔庶務会計担当〕をつとめていた」<sup>⑦</sup>。円順が明治三二年七月一日に記した光賢寺の由来は、つぎのとおりである。

古昔当寺ハ蒲原郡加茂在大崎村（現三条市）ニ設立アリシコトハ明了ナリト雖モ其祖先ノ姓名年代詳カナラズ唯一貫代御本尊御裏ニ元和六（一六二〇）年六月三日蒲原郡大崎村光賢寺願主専竜ト准如上人（本願寺第一二世、天正五・一五七七〜寛永七・一六三〇）ノ御筆蹟ニテ明記アルノミ而シテ当寺過去帖ニハ其後三島郡加納村（延宝年時分ハ刈羽郡ノ名称ナク三島郡ニ属ス祖師聖人ノ御裏ニ三島郡加納村願主順照トアルハ其一例ナリ）ニ移転シ一度中絶ニ及ビ更ニ高田中戸山ヨリ専入坊入り来リ寺号再興ストアリ

円順は光賢寺の第一二世住職となり、法務を行うとともに、「竹細工と藁細工の技術にも優れていて、この地方の人たちの先生であり、人望があった」。法名は累徳院釈円順であり、兄の円了が贈ったものである。

二女のヨシは、明治元（一八六八）年一月一日に生まれた。明治二二（一八八九）年一〇月七日に、新潟県三島郡道半村の水島丈吉の二男である惟孟と結婚した。地主である水島家の惟孟とヨシの家に誕生した義郎は東京農学校に学んだ。このとき、伯父の円了の家に下宿した。甥の義郎は円了の哲学館を「陰ながらの筆奉公」といつて支援した勝海舟の赤坂の水川邸へ出向き、海舟の揮毫した書を受け取っていた。ある日、海舟は円了のもとへ書運ぶ義郎に対し、有名な江戸城無血開城を詠んだ詩を書いて義郎に与えている<sup>55</sup>。卒業後、義郎は郡役所に農業技師としてつとめ、当時珍しかった「チューリップ」の球根を入手し、その栽培に取り組み、新潟県下に普及させて新たな産業を振興するなどの業績を挙げた。

三女のセツは、明治三（一八七〇）年一二月一九日に生まれた。明治三二（一八九九）年三月二七日に、新潟県刈羽郡千谷沢村の湯本寛治と結婚した。湯本家は大地主の一つであった。

四男の良慶は、明治七（一八七四）年一月一五日に生まれた。良慶は、東京美術学校（現東京芸術大学）に学び、明治三二（一八九九）年四月に、兄の円了が創立した京北中学校の教師（図画担当）に就任したが、詳しい



経歴はまだわからない。

以上、生家の慈光寺における円了の家族についてみたが、円了のちに学術に関心をもち、それを普及させようとした思想的な基礎は、生家の慈光寺や母の出身である榮行寺に見られる。それとともに、父の円悟や母のイクが時代の思潮を理解して、子供へ新教育を与えていた。円悟とイクの間には四男三女の七人の子供が成長した。すでに述べたが、円了の兄弟はそれぞれ教育を受けたのちに、円成、円順、良慶の三人はともに兄円了の事業の発展に協力している。以上のことが明らかになった。

### 三 円了の妻と子供

円了は明治二〇（一八八七）年二月四日に、吉田敬と結婚した。そして、その家庭で三人の子供を育てた。

妻となった敬は吉田淳一郎・芳夫妻の二女である。敬は文久二（二八六二）年三月一日に生まれ、昭和二六（一九五二）年一月四日に亡くなった。敬は、江戸時代に初の内科の蘭方医で、加賀藩主前田家のお抱えの医師（御典医）であった吉田長淑の家系に生まれた。西洋医学（蘭方医学）が日本に伝来してから二〇〇年余り経過しても、医師としての外科は知られても、内科の存在はわからなかった。寛政五（二七九三）年に宇田川玄随の『西説内科撰要』が出て、初めて西洋の内科を知ったのであるが、その創成期に漢方医の「ごうごうたる非難攻撃の中に敢然として和蘭内科をもって初めて世に立ったのが吉田長淑である。」<sup>36</sup>

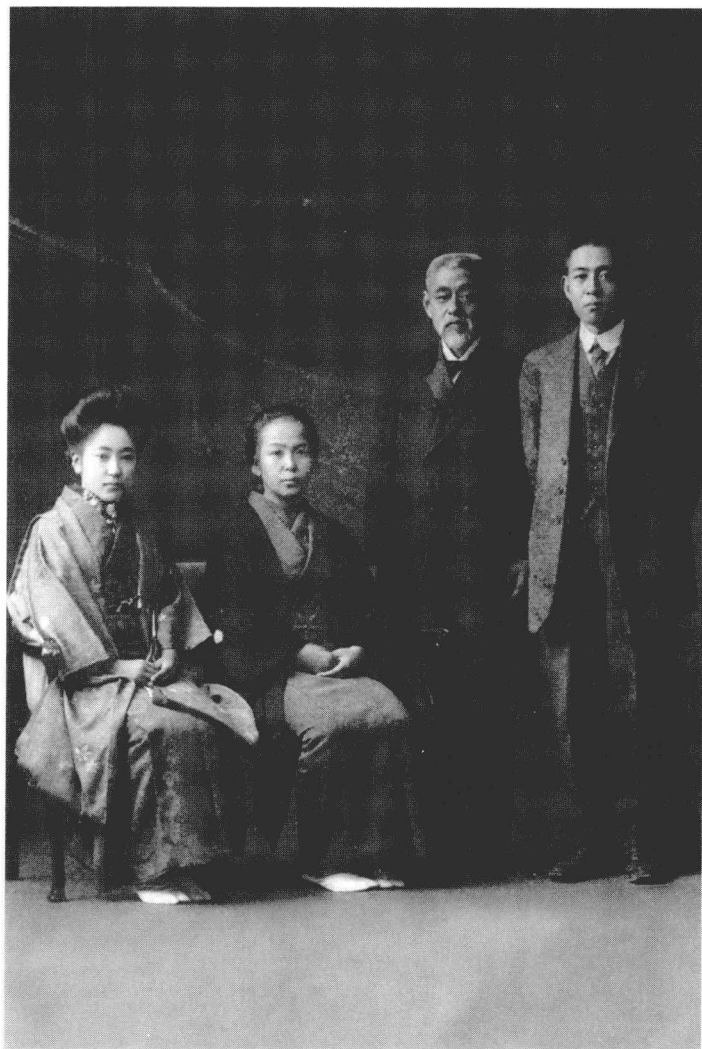
長淑は安永八（二七七九）年に、江戸駒込追分の幕府の先手同心馬場兵右衛門の三男として生まれ、「早くから母方の叔父吉田長肅（桂川甫周門下の蘭方外科医）の嗣となったようである」<sup>37</sup>。漢方を学んだ長淑は、その後蘭方に転換し、その研究から「和蘭内科」を提唱して開業した。蘭方医関係者の推薦で加賀藩の医師となった

が、多忙を極める活動の中、「文政七（二八二四）年六月金沢に病む（第一二代藩主）斉広の急使により即日江戸を出立したが、途中越後高田にて急病に罹り、強いて金沢に至ったものの遂に八月十日を以て死去したのである。享年四十六才であった。」<sup>39</sup>長淑の墓は、曹洞宗の棟岳寺（石川県金沢市石引二丁目）にある。また、「石碑〔駒谷吉田先生碑〕が臨済宗妙心寺派の養源寺（東京都文京区千駄木五丁目、同寺は東洋大学の白山校舎に近く、吉田家の墓もある）にある。結婚した長淑には子供がなく、吉田家は養子を迎えた。

敬は長淑の養孫にあたる。東京府本郷区丸山新町に住んだ父の淳一郎と母の芳は、敬に対して教育を与え、敬は明治一三（一八八〇）年七月に東京女子師範学校（現在のお茶の水女子大学の前身）の小学師範学科を卒業した<sup>40</sup>。敬は卒業後に、最初は築地居留地にあったキリスト教主義のA6番学校（現在の女子学院）に就職したと伝えられている<sup>41</sup>。その後、明治一九年には開設間もない東洋英和女学校の教師となった。担当した科目は普通学と数学である<sup>42</sup>。

それから一年余り後の明治二〇年に、敬は円了と結婚した。仲人は目賀田種太郎・逸夫妻で、逸は海舟の娘であり、種太郎はアメリカ留学後に文部省・大蔵省の官僚となり、貴族院議員や枢密顧問官となった。この夫妻の縁で、円了は海舟の知遇を受けることになる。

円了は東京大学、敬は東京女子師範学校という、当時の最高の教育機関に学んだ夫妻である。著述や哲学館・哲学堂の運営という多忙な円了を支えたのは、吉田長淑の養孫にあたる妻の敬である。円了は三〇年間にわたる、国内では巡回講演を、国外へは三度の世界視察旅行を行い、家庭に不在の日々が多かった。その留守をあずかったのは敬である。敬は家事や育児はもちろん、哲学館の経理なども協力するほどの能力があり、長男の玄一の妻であった信は、「母も本ばかり読んでいて、物欲はありませんでしたし、上流階級のつきあいが嫌いで、人



大正5年頃の井上家（右から 玄一、円了、敬、澄江）

にへつらうことが嫌いでした<sup>〔45〕</sup>と語るように、質実で知的な女性であったと考えられる。

長男の玄一は、明治二〇（一八八七）年九月二八日に生まれ、昭和四七（一九七二）年九月一日に亡くなった。円了は初子の誕生とその成長に関心をもち、「〇小児ノ成長」<sup>〔46〕</sup>をテーマに人間になる過程や資質の形成について、玄一を対象として観察し記録している。玄一の学歴は、「小学校は学習院に入ったが、途中、東京高等師範小学校に移り同中学校をへて第一高等学校文科（英法）に進学、東京帝国大学法学部を大正二年に卒業」<sup>〔47〕</sup>した。玄一は在学中に亜熱帯地区の農業に関心をもっていたが、父の円了は三井の幹部と相談して、三井銀行に就職させた。銀行員になった玄一は、大正一〇（一九二一）年に海外のニューヨーク支店に移り、四年間の海外勤務を経験した。昭和九年に財団法人三井報恩会が設立されると、参事兼文化事業部長に就任し、戦後も同会の役員を継続した。

父の円了は遺言を公開して、井上家が東洋大学の運営にかかわることを禁じたので、玄一はこれを厳格に守った。また、玄一は大正八年に中国の大連で急死した父の遺志・精神を継承して、哲学堂を財団法人とし、その理事として同公園の維持・発展に尽くした。焼失の可能性が高まった太平洋戦争中に、父の遺言にしたがって哲学堂を東京都へ寄贈した。この玄一の選択によって、父の円了が創設した哲学堂は現在も都民に愛されるユニークな公園として存続している<sup>〔48〕</sup>。

長女の滋野は、明治二三（一八九〇）年四月二〇日に生まれ、昭和二九（一九五四）年に亡くなった。滋野は母と同じと女子高等師範学校の附属高等女学校の甲組に学び、明治四〇（一九〇七）年に卒業した。明治四二（一九〇九）年五月一五日に、山口県の金子常三郎の長男である恭輔と結婚した。

金子恭輔の履歴については九州大学の大学史において、つぎのように述べられている<sup>〔49〕</sup>。

教授金子恭輔は明治三十九年東京帝国大学採鉱冶金学科を卒業後、藤田組小坂鉦山に就職し大正二年秋田鉦山専門学校に招へいされ教授となった。その後大正四年本学教授となった……この間明治四三年一月より三カ年ドイツのアーヘン工科大学のルア (Ruhr) 教授の研究室に留学した。金子教授はルア教授にその才能を買われ、……世界的に貴重な研究 (で成果をあげ) この功績により同教授は大正一二年一月二日アーヘン工科大学で Dr. Ingenieur の学位を授けられた。……大正六年五月一日工学博士の学位を授与され……〔九州帝国大学には〕昭和三年九月まで在任、請われて兼二浦製鉄所に移り、のち当時の日鉄八幡製鉄所技研監事になったがその時期に昭和九年より一二年まで非常勤講師となり冶金学大意を講じた。

また、大学在職中の大正九 (一九二〇) 年四月七日に、昭和天皇が皇太子として行啓したとき、「日本刀鍛錬ノ順序」というテーマで標本・古文書を提出し、皇太子はそれを台覧した<sup>47)</sup>。

二女の澄江は、明治三二 (一八九九) 年八月七日に生まれ、昭和五〇 (一九七五) 年に亡くなった。澄江も母と同じ東京女子師範学校の附属高等女学校の乙組に学び、大正六 (一九一七) 年に卒業した。澄江はその後、土田豊と結婚した。土田の作成した「経歴書」に、つぎのことが記されている<sup>48)</sup>。

土田豊は明治三一 (一八九八) 年一月二八日に東京に生まれ、昭和五一 (一九七六) 年六月に没した。学歴は東京帝国大学法学部の卒業で、在学中に高等試験外交科に合格していた。卒業後は外務省に入省し、大正一一 (一九二二) 年四月に広東領事館領事官補を初めとし、中国とフランスの公・大使館の書記官となった。昭和九 (一九三四) 年九月に外務事務官 (通商局第一課) に就任するなどしたが、昭和一四 (一九三九) 年から終戦までは、中国大使館の要職にあり、敗戦の前年 (二九四四) には中国特命全権公使 (上海事務所長) となり、日本人の引揚げという困難な敗戦処理の責任を担った。戦後の昭和二五 (一九五〇) 年に外務省から依願免本官となっ

た。昭和三一（一九五六）年一月にエジプト大使となり、このとき、シリア、エチオピア、サウジアラビア、スーダン、リビアの公・大使を兼任した。昭和三三（一九五八）年二月にサウジアラビア大使となり、三年間の任務を終えて依願免本官となった。これ以後、中東地域の外交経験から、昭和三六（一九六一）年五月二日にアラビア石油株式会社顧問となり、また日本エジプト友好協会の顧問となった。昭和三七（一九六二）年五月から外務省所管の財団法人中東調査会の理事長に就任し、日本の中東に関する研究・調査を強く推進した。中東調査会の理事長は一四年間に及んだ。

以上、円了と敬の三人の子供について述べたが、円了は子供の命名について、つぎのように記している<sup>40</sup>。

己の子女には格別良名を命じたるにはあらず。余は一男二女あり、男を玄一と呼ぶ。これ長子なるをもつて、『太玄経』の「玄有二道」(玄は一道にあり)の語より取れり。女を滋野および澄江と名づく。その一は春期芳草の野外に繁茂せるときに生まれたるにより、その二は澄江名月の時節に長じたるによるのみ。

長男の玄一は父の円了と家族について、自らの小学校時代の在りし日をつぎのように記している<sup>41</sup>。

古い昔の話になるが、わたくしの小学校時代、父は母と共にわたくしと妹を連れてよく散歩した。当時本郷区駒込蓬萊町の哲学館構内に住まっていたが、近所では根津権現から団子坂へ出て菊人形を見て菊そばを食べた。

玄一はこれに続いて、散歩した上野、浅草のこと、家族で食事した店を紹介している。哲学館や哲学堂という二つの事業を創設した期間、円了は全国巡回講演や世界旅行などで家を離れる時間が多かった<sup>42</sup>。そして、円了は大正八（一九一九）年に中国の大連で講演中にたおれ、そのまま死去した。急死である。その後の家族のことを、お手伝いさんをつぎのように語っている<sup>43</sup>。

## 註

円了先生が亡くなった後、奥様は一週間に一回、書をならってました。お嬢さん（澄江）は少し精神的に不安定になったようです。奥様は、『ちょうどあなたが相手になつてくれるからいい』とおっしゃってました。お嬢さんから、先生の話はしょっちゅう聞いてました。

円了はすでに述べたように、生前から遺言を公開し、また毎年遺言を書き換えていた。それぞれの家族や創設した学校などへの円了の思いは、死後に開封された遺言に記されていたと考えられる<sup>66</sup>。

(1) 井上円了「付録 第一編 信仰告白に関して来歴の一端を述ぶ」『活仏教』（井上円了選集 第四巻）、東洋大学、平成二年）四九六頁。

(2) 『三島郡誌』三島郡教育会、昭和一二一年、九四六頁。

(3) 『越路町史 通史編 上巻』越路町、平成一三年、五五五頁。

(4) 『越路町史 資料編1 原始・古代・中世』越路町、平成一〇年、四九五～四九六頁。

(5) この資料は、前掲の『越路町史 資料編1 原始・古代・中世』の五九五～五九六頁に翻刻されている。引用は同書によった。

この文書において檀徒惣代の筆頭にある西脇所次郎の先代は「所右エ門」といい、同家にはつぎのような口伝が残されている。「此処で所右エ門の昔語り口伝を記して、後日の参考になればと思ひます。浦は徳川幕府末まで浦村と云つて、大村の為、上村、中村、下村と三区に分れ、明治大正の頃より来迎寺村浦となりました。所右エ門は浦の下村で有り、四百年続いた古い家である。其の面影は、現在慈光寺本堂の所に以前の所右エ門があり、前の村道まで出る題門が所右エ門の屋敷で、四百年を語る杉の木が両側に立並んで居り、南側の一番前に樺の太木が昭和の初期まで残って居りました。慈光寺は以前慈光院と称し、天台宗であった。信濃川の向島に浦村の飛び地で五百島と云（う）田畑あり。其の境界の東に慈光院川が今も名が残って居る。其処に天台宗慈光院があった。又所右エ門は上條村の善

行寺の檀家であったが、善行寺と慈光院が縁組があり、檀家が嫁子に着いて慈光寺の檀家になった。其の時所右工門も着いて行ったのです。其の慈光寺が信濃川洪水に度々逢うので、浦村へ来る事になり、文政の頃、今より百六十五年、当時の横目所右工門の屋敷へ慈光寺の本堂が建立される事になりました。題門の百五十坪は所右工門が寄付する事になりました。所右工門は屋敷換へをして前の道の東側の、現在の処に元の家を二間詰めてかやぶきの家が改築され移転したのである。……慈光院は万治元年五月、天台宗から浄土真宗大谷派東本願寺に帰向し、慈光寺となった。百二十年前（昭和五十八年より）（中山忠亮『西脇所右工門物語』昭和五十九年七月刊、利家版、引用にあたって句読点を付した）。

- (6) 『越路町史 通史編 下巻』越路町、平成一三年、八三頁。
- (7) 『川西町史 通史編 上巻』川西町、昭和六二年、九八七頁。
- (8) 『川西町史 資料編 上巻』川西町、昭和六一年、二九一〜二九二頁。
- (9) 同右、七七三〜七七四頁。
- (10) 『十日町市史 通史編Ⅰ 自然・原始・古代・中世』十日町市役所、平成九年、三四九頁。
- (11) 中魚沼郡教育会編『中魚沼郡誌（複製版）上巻』妻有の文化遺産を守る会・中央出版、昭和四八年、五〇八頁。
- (12) 栄行寺の住職であった大溪不二男氏よりの聞き取りによる。
- (13) 栄行寺の前坊守・大溪智子氏よりの報告書による。
- (14) 『開導新聞』三七号、明治一四年一月九日、六頁。
- (15) 『開導新聞』五一号、明治一四年二月二〇日、一頁。また、同年五月一七日には「米北小教校建築ニ付説諭方」にも任命された（同新聞、九〇号、明治一四年六月一五日、二頁）。
- (16) 「父井上円悟宛書簡」（『東洋大学百年史 資料編Ⅰ・上』東洋大学、一九八八年）五〇〜五二頁。
- (17) 石黒忠恵『懐旧九十年』岩波文庫、昭和五八年、九〇〜九二頁。
- (18) 井上円了『南船北馬集 第四編』（井上円了選集 第三卷）東洋大学、平成九年、一〇五頁。
- (19) 拙稿「井上円了と著述―井上円了略年譜・井上円了著述目録・『井上円了選集』目次」（井上円了センター年報）一三号、平成一六年）七一〜一〇六頁参照。



- (20) 加唐興三郎編『日本陰陽歴史対照表 下巻』ニット、平成五年、一五一―一六頁。
- (21) 井上円了『円了茶話』(『井上円了選集 第二四巻』、東洋大学、二〇〇四年) 一八八頁。
- (22) 円了の真宗大谷派における事績は、高木宏夫氏や真宗大谷派企画室で調査されたものにもとづいている。かつて森章司氏が「井上円了と真宗大谷派教団」(『東洋学研究』二二号、昭和六三年、二五頁)の註(2)で、拙編の「井上円了略年譜」(『井上円了研究』二号、昭和五九年)の得度の年月日について疑問視されたことがあったが、得度の事実についてはこのような調査にもとづいているので、森氏の疑問を解消しておきたい。
- (23) 井上円了「付録 第一編 信仰告白に関して来歴の一端を述ぶ」『活仏教』(前掲書) 四九五頁。
- (24) 拙稿「井上円了と清沢満之―二人のエリートの関係とその資料」(『井上円了センタ―年報』一二号、平成一五年) 三七―七〇頁参照。
- (25) 「僧正」は教師の称号である。真宗大谷派の教師の等級と称号は上から、「一級 大僧正、二級 権大僧正、三級 僧正、四級 権僧正、五級 大僧都、六級 権大僧都、七級 僧都、八級 権僧都、九級 律師、十級 権律師、十一級 法師位、十二級 満位、十三級 入位」である。また、「講師」は学階の称号である。真宗大谷派の学階の等級と称号は上から、「一 講師、二 嗣講、三 擬講、四 学師」である。
- (26) 『本山報告』一三三頁、明治一九年七月一日、一〇頁。
- (27) 同右、一九九頁、明治二〇年一月一日、六頁。
- (28) 「哲学書院の設立」『東洋大学百年史 通史編1』東洋大学、平成五年、六六―六八頁。
- (29) 「○捧呈前日の集会」(『教界時言』四号、明治三〇年一月二八日) 四七―五三頁、また、「○各地方の動静」(『教界時言』五号、明治三〇年三月二八日) 四二―四三頁を参照。
- (30) 「○任免」(『本山事務報告』四六号、明治三〇年七月三〇日) 六頁。また、「議制局互撰賛衆」など(『教界時言』九号、明治三〇年七月二九日、一四―一七頁)を参照。
- (31) 「議制局見聞録」(『教界時言』九号、明治三〇年七月二九日) 三二―三三頁。この議会の見聞録は同誌の次号(二四―二六頁)にもあり、合わせてみると、当時の議会の様子がわかる。
- (32) 「○同盟会員の賛衆辞任」(『教界時言』一二号、明治三〇年一〇月二九日) 三七頁。

- (33) 円順については、光賢寺（現柏崎市大字加納）の第一四世の藤井信栄氏の報告による。代々の住職の継職については、釈専竜からと、釈専入坊からの二通りがある。ここでは後者に従った。
- (34) 拙稿「哲学館の書記長をしていた祖父」（『井上円了研究』三号、昭和六〇年）三七～三九頁参照。
- (35) 海舟と円了の関係については、拙稿「勝海舟と井上円了―勝海舟と福沢諭吉、新島襄との関係と対比させて―」（『井上円了センター年報』七号）、九九～一三四頁を参照。水島家については、子孫の水島敏氏よりの聞き取りによる。
- (36) 津田進三「日本最初の蘭方内科医 吉田長淑」一六頁。
- (37) 同右、七頁。
- (38) 同右、八頁。
- (39) 『女子高等師範学校一覧 自明治廿五年 至明治二六年』女子高等師範学校、七八頁。
- (40) 女子学院資料室の調査によれば、明治一三年の東京女子師範学校の卒業年次から、敬が教師となったのはA6番学校の後身の学校で、原女学校（明治九～一一年）、新栄女学校（明治九～一三年）、桜井女学校（明治九～一三年）のいずれかではないかといわれる。現在の女子学院は明治二三年に三校を統合して誕生したものである。
- (41) 『東洋英和女学校五十年史』東洋英和女学校、昭和九年、三五〇頁。
- (42) 井上信子「父 井上円了」（『井上円了研究』三号、昭和六〇年）七六頁。井上信子氏は長男の玄一氏の妻である。
- (43) 井上円了『実地見聞集 第二編』（『井上円了センター年報』二号、平成五年）九二～九四頁。
- (44) 井上公資「父・井上玄一」（『サティア』二〇号、東洋大学井上円了記念学術センター、平成七年一〇月）三六頁。
- (45) 拙稿「井上円了と哲学堂公園一〇〇年」（『井上円了センター年報』一一号、平成一四年）五三～一三四頁参照。
- (46) 『九州大学五十年史 学術史 上巻』九州大学創立五十周年記念会、昭和四二年、五三三～五三四頁。
- (47) 折田悦郎「行幸啓と『お手植え』の銀杏」（『九大広報』一五号、二〇〇〇年一月）、一八頁。
- (48) 土田豊「経歴書」はAOCホールディングス株式会社総務部所蔵。また、中東調査会のホームページの「中東調査会の歩み」を参照した。なお、土田豊夫妻がエイジプト大使に赴任したときに、義姉の信子氏も同行した。信子氏の記録が東洋大学井上円了記念学術センターに寄贈されている。
- (49) 井上円了『円了茶話』（『井上円了選集 第二四巻』、前掲書）一八八頁。

(50) 井上玄一「父円了の娯楽・道楽」〔『サティア』二〇号、前掲書〕三五頁。

(51) 井上信子「父 井上円了」〔前掲書〕七三〜七八頁を参照。

(52) 大和田いせ「円了先生没後の井上家」〔『サティア』一号、平成二年一月三〇日〕三二頁。

(53) 井上円了「遺言状」〔『東洋大学百年史 資料編Ⅰ・上』、前掲書〕六九〜七二頁。

本稿は、田村晃祐氏（東洋大学名誉教授、元井上円了記念学術センター研究員）が円了の妻の「敬」について石川県金沢市の棟岳寺を調査して、筆者に資料を提供されたことが契機になったものである。その後、田村氏は円了の孫にあたる井上民雄氏（東洋大学名誉顧問）に井上家に関する資料の作成を依頼し、民雄氏がこれに応えて提供された情報も本稿の基礎となった。その中から筆者は多くのことを学んだ。両氏に対して御礼申し上げたい。また、井上家の戸籍などの基礎資料は井上円了記念学術センターに所蔵されていたが、同センターの資料室員であった山内瑛一氏からご教授をいただいた。それらをもとにしたが、今回の執筆にあたり、さらに多くの方々に調査をお願いした。氏名などを記して、ご協力いただいた方々へ謝意を表したい。

#### 調査協力者・協力機関（五十音順）

AOCホールディングス株式会社（中島馨氏）、栄行寺（十日町市、真宗大谷派、前坊守大溪智子氏）、お茶の水大学（米田俊彦氏、館かおる氏、室岡和彦氏）、金内絢子氏（長岡市）、九州大学文書館（折田悦郎氏、筑紫啓子氏）、京北学園事務局（安部博己氏）、光賢寺（柏崎市・真宗大谷派・前任職藤井信栄氏）、財団法人中東調査会（中島勇氏、金子真夕氏）、慈光寺（長岡市、真宗大谷派、住職井上円秀氏）、十見定雄（長岡市・医師）、女子学院資料室（梶原恵理子氏）、新日本製鐵株式会社（黒田紗矢氏）、高橋健吉氏（長岡市・慈光寺総代）、棟岳寺（金沢市・曹洞宗）

在田全龍氏)、東洋英和女学院(谷川祐子氏、保坂綾子氏)、中村睦子氏(長岡市・真言宗豊山派德聖寺)、中山忠氏(長岡市・表具店主)、新潟県立文書館、藤木和夫氏(十日町市・東洋大学卒業生)、水島敏氏・富子氏(長岡市・水島家当代夫妻)、邨上了圓(真宗大谷派・真宗寺住職)、養源寺(東京都文京区・臨濟宗妙心寺派)、吉岡又司氏(長岡市・越路円了会会長)